

中国の整然とした都城制は、メソポタミアには見られない。メソポタミアの都市は、都市神の神殿域が中心に置かれ、その整備に意を向けるが、居住区は雑然としており、計画的な区画ではない。ギリシャ人・ローマ人が各地に建設した都市は都市プランに則り整然としている。土木作業の簡便さを求めた結果かもしれないが、すくなくとも、中国の都城との相関を思い起こさせる。中国の都城制は、王が明白な階層秩序をもってすべてを律して支配することを表現するものと解される。明白で整然とした全体秩序を志向することは、西アジアに共通しないで、逆説的かもしれないが、ギリシア・ローマから西ヨーロッパに流れる思想と通底すると思われる。

日本史学専修 川尻 秋生

妹尾達彦氏に対するコメントと日本の都城制について私見を述べた。

妹尾氏の発表は、これまで氏が積み重ねてきた中国の都城制研究を踏まえ、さらに、その成果を世界的視野にまで及ぼした壮大な内容である。現在、歴史学研究全般にわたって、個別細分化が進んでいる中であって、今回のような研究は、時代や地域を超えて、範とするに足る貴重な研究である。その内容に対して、私がコメントするだけの学識もないが、ここでは、妹尾氏が強調した都城と宗教、とくに仏教との関係について、若干私見を述べておきたい。

平成一八年度早稲田大学史学会大会報告

確かに、中国の都城には、多くの寺院があったが、王権と仏教の関係は、必ずしも良好ではなかった。中国では、南北朝後半から隋唐にかけて、儒教・仏教・道教が王権を巻き込んで、しばしば激しく対立した。これは、中国仏教のなかに、僧尼はシャカのみに加え、俗権力には服従しないとの考えがあったことに起因している（川尻秋生「寺院と知識」『列島の古代史Ⅱ 社会集団と政治組織』岩波書店、二〇〇五年）。したがって、こうした中国仏教の存在形態から考えて、仏教の宇宙観が都城にどのように反映したのかという問題は、そう単純ではないように思われる。また、中国の都城には、寺院とならんで道観がある。これが都城制とどのような関係にあったのかという点も今後の検討課題であろう。

後半では、日本の都城の若干の問題点を指摘した。最近、飛鳥地域の都城について考古学的な調査がなされるようになった。その結果、多くの事象が解明されてきたのだが、とくに、飛鳥岡本宮（舒明）・飛鳥板蓋宮（皇極）・後飛鳥岡本宮（斉明）・飛鳥浄御原宮（天武）がほぼ同一場所に造営されたことが明らかになった点は大きな収穫であろう。ところが、飛鳥浄御原宮は、母である斉明大王が造営した後飛鳥岡本宮に修造を加え、その東南に宮（東南廓・エビノコ廓）を新たに造営したのみで、新たな宮都を造営しなかった。母の宮があったといっても、そもそも、利用面積が限られる明日香川に近いこの地に、なぜ宮を営んだのかも説明がつきにくい。

周知のように、天武天皇は、大友皇子との皇位争いである壬申の

乱に勝利し、大臣をおかず、『万葉集』では「神」と詠われた専制君主である。一方では、はじめての本格的な令である飛鳥清御原令の編纂を命じた。いわば、律令国家の青写真を設計した天皇である。しかし、平城宮の原型となった、藤原宮（持統）や難波長柄豊崎宮（孝徳）よりも、小規模な宮しか営まなかったことになる。

このように考えると、天武の王権自体がこれまでいわれてきたように、強大であったとは一概に決めつけられない可能性も生じる。『日本書紀』は、天武が編纂を命じ、その子孫が完成させた正史である。したがって、『日本書紀』には、天武を絶対視する思想がそこかしこに見え隠れする。都城制からみれば、天武の王権については、まだ再考すべき余地があるように思われる。